



100回記念号



農村工学研究部門

分布：全国

ヤナギタデ (タデ科)

柳 蓼 別名：マタデ、ホンタデ

ベルシカリア ヒドロピペル
学名：Persicaria hydropiper

主な生育場所

水田、畦畔、休耕田、水路わき、川辺、ため池、湿地など、水辺に生育する。転換畑など水田跡の湿っぽい環境下だけでなく、発芽時に潤湿であれば生育期には乾くような畑地にもみられる。

名前の由来：タデの仲間のうちでも葉が披針形で、同じように湿地に生えるヤナギ類の葉に似ていることから、柳蓼。

特徴

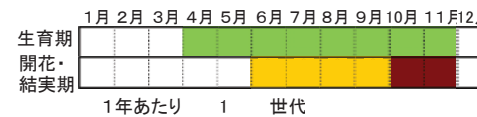
高さ40~60cmほどになる一年生。根本は地面を這い、やや太くなる節から根を下ろし斜上する。短い葉柄で互生しほとんど無毛の葉の葉鞘には1~5mmの縁毛がある。夏から秋にかけて、茎や枝先に淡緑色か淡紅色の花をまばらな穂状につける。腺点の多い花被に包まれた濃褐色で3稜またはレンズ形の種子には光沢がない。



<農業との関係>

全国の水田に普通に見られる雑草であるが、大発生しない限り水稲と競合するようなことは少ない。しかし、西南暖地では、通常は夏緑一年生のヤナギタデの株が越冬して残り問題化することもある。霜が降りない地域でヤナギタデが多発生する場合には、イネ収穫後に早めに秋耕することも重要。

<生活史> 関東地方の例(目安)



花穂にはまばらに淡緑色の花をつける

<類似種> 同様の湿地環境に生育するポントクタデの葉の脈や縁には伏毛が生え、表面に八の字型の斑が目立つ。また、イヌタデの葉鞘の縁毛は長く、花穂には密に花をつける。類似種と最も異なる点は、ヤナギタデの葉のみ辛みがあること。

<一言うんちく>

ことわざ「粟食う虫も好き好き」の粟とは、ヤナギタデのこと。辛味成分ポリゴジアルを含むため、葉を噛むとピリリとしびれるほどで、ネパールでは魚毒として漁にも用いられるそうです。それにもかかわらずギンモンアカヨトウ(蛾)の幼虫などは好んでこの葉を食べるそうです。



葉鞘には1~5mm程度の縁毛

<人との関わり合い>

ヤナギタデの辛味は特有の香りを持ち、変種ムラサキタデとして栽培されるなど、薬味として昔から利用されてきた。芽生えた紅紫色の双葉を刺身の「つま」として利用したり、葉をすりつぶしリンゴ酢に加えたものは「タデ酢」として鮎の塩焼きによく合う。味噌やみりんに加えると「タデ味噌」となり、白身魚につけて焼くとおいしい。また、辛味成分のポリゴジアルには、抗菌効果、がん細胞の増殖抑制などが報告されている。また、ヨーロッパではヤナギタデの葉から黄色の染料をとっている。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋(蓼の花) ※水辺に生育する蓼類を含む。】 しのゝめや雲見えなくに蓼の雨 (与謝 蕪村)
蓼の葉や泥鯿隠るゝ薄濁り (正岡 子規) 刈りかけて去る村童や蓼の雨 (杉田 久女)
やほ蓼も川の瀬みればおいにけり辛しやわれも年をつみつ (曾禰 好忠)
からきにも馴るれば馴れて過ぐす世に蓼はむ虫を何かとがめむ (村田 春海)

分布：北海道を除く全国

ツルマメ (マメ科)

グリシナ マックス ソヤ
学名: *Glycine max* subsp. *soja*

蔓豆 別名：ノマメ、クズカツラノハエ(久須加都良乃波衣)

主な生育場所

水田や畑の畦畔、路傍、野原、堤防法面などに生える。河原の高水敷や水路沿いなどやや湿った水辺の近く日当たりのよい場所によくみられる。ツル植物なので、フェンスなどに巻き付くとよく伸びる。

特徴

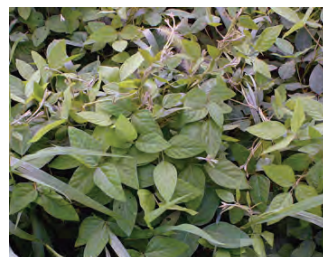
一年生つる性植物で下向きに粗い毛の生えた茎は細く長く伸び他に巻き付く。長い柄がある葉は互生し、両面とも伏毛を密生する狭卵形～披針形の3小葉からなる。8～9月に葉腋から花柄を伸ばし長さ5～8mmで紅紫色の蝶形花を3～7個つける。まれに白花もある。豆果は長さ2～3cmで、淡褐色の毛を密生し2～3種子を入れる。



名前の由来 茎はツルになって伸び、大豆のようなサヤをつけることから、ツルマメ。別名のノマメ(野豆)は大豆に似ていて野原に生えることから。クズカツラ(葛蔓)もマメ科のツル植物を表す。

<農業との関係>

野辺に生えるツルマメを品種改良したものが、栽培種の大豆となったとされる。そのため、ごくまれに大豆と交雑することが知られ、その雑種はツル化した。熟すとサヤがはじけるなどツルマメ由来の不良形質が発現することが多く、大豆畑の周辺では大豆の品質低下を防ぐため除草することがのぞましい。また、畦に見られることがあるが、ほ場内に生えて雑草化することは少ない。



小葉は長さ2.5～8cm、幅1～3cmの狭い楕円形

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種>

混生もするヤブマメの葉は丸みを帯び、花はツルマメの倍以上の大きさに開花時期もやや遅い。やや乾いた草地や林縁などに生育するヤブツルアズキやノササゲの花は黄色。ヤブツルアズキの葉は軽く3裂し、ノササゲは毛が少ない。

<一言うち>

大豆の原種なので、花や豆果は大豆にそっくりです。縄文時代前期の三内丸山遺跡などからはツルマメと考えられるマメが出土しており、日本でも大豆の栽培が伝播する以前には食用として利用されていたようです。種子には大豆と同様にイソフラボンなどポリフェノールも含まれています。

<人との関わり合い>

種子は大豆と同様に食べることができるが、サイズが小さく熟すとサヤからはじけやすいため、大量に集めることが難しい。固くなる前の柔らかいサヤを集めて茹でると枝豆のように食べられるが大豆ほどの味はなくすっけない。また、大豆は食用だけでなく、サポニンやポリフェノールなどが多く含まれるため、その煮汁は女性の産後の回復促進、食中毒、多くの胃腸病に効果があるとされるが、ツルマメは大豆ほど機能性成分の含量は少なく、効果を有するほどでない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：不明】大豆の原種で野辺に普通にみられるツルマメですが、これまで詩歌に詠まれたことはないようです。栽培種の「大豆」は秋の季語で、収穫やその後の作業風景を「大豆ひく」「大豆干す」などとした季語もあります。

霊棚の稲も大豆も色づきて(高野 素十) 豆引も足駄でおはす御僧哉(会津 八一)

この冊子の上の記事はこちらのページをご覧ください。
https://www.naro.go.jp/laboratory/nire/mail_magazine/genre/kusabana.html

農村工学研究部門メールマガジン

記事・タイトル	配信No.	配信年月
藪の中でひっそりと咲く花の「隠された心」とは～ヤラン～	第134号	2021年7月
この草の上から転んで擦り傷をこさしても血が止まる!?～チドメグサ～	第133号	2021年6月
夜の路傍で月を見上げているあの草は?～コマツヨイグサ～	第132号	2021年5月
タンポポの装束?いえいえ、そっくりだけど別種の外表種です～ブタナ～	第131号	2021年4月
難を転じて福となす 来年度は人々が集い笑い合える年になりますように～ナンテン～	第127号	2020年12月
ガーデニングなどお馴染みのあの草は吸止めの薬草だった～リュウノヒゲ～	第126号	2020年11月
中国最古の薬物書にも登場し、今でも日常的に飲用するスーパー健康食品～チャノキ～	第125号	2020年10月
揚貴妃が愛し、あの名薬にも登場する赤い実は不老長寿の薬～クコ～	第124号	2020年9月
明智光秀の家紋で有名なあの草は、吸止めに用いられるにもなる?～キキョウ～	第123号	2020年8月
邪気を払う? 田んぼで最も馴染みのあの草の名の由来は.....コナギ	第122号	2020年7月
今年最後に紹介する草花は「善良で陽気な外来種」～ウラジロチチコグサ～	第117号	2019年12月
通ばたみかけの試験管グラスのような草は?～チカラシバ～	第116号	2019年11月
秋耕後の田んぼで見かける「黒い草」の正体は～クログワイ～	第115号	2019年10月
秋の野辺によく目立つあの花はサラダ菜の仲間なんです～アキノノゲシ～	第114号	2019年9月
刈り田の宝もの探しにはうってつけの小さな絶滅危惧種 ミズマツバ	第113号	2019年8月
とっても大きな名前ですが、実際は地べたに伸びる小さな草花です～コニシキソウ～	第112号	2019年7月
初夏から梅雨時にかけて里山にみられる万葉歌人も好んだ白い花～ウツギ～	第111号	2019年6月
田んぼに浮かぶコケだけど産産にしないでね!～イチョウキゴケ～	第110号	2019年5月
春の風薫るころ、野良をピンク色に染め上げる中国由来の花ゲンゲ	第109号	2019年4月
去年は心清らかに過ごせますように お正月の縁起物～ウラジロ～	第105号	2018年12月
この季節、道端でよく見かける熱帯からやってきた「ひつつまむし」～コセンダングサ～	第104号	2018年11月
秋も深まる中、大豆の先祖さまを見つけてみよう～ツルマメ～	第103号	2018年10月
人生いろいろ、好みもいろいろ、(華(なで)食)う虫も好き好き、の壺とは?～ヤナギタデ～	第102号	2018年9月
残暑の中、このピンク色の花穂が目立ち始めると、秋の気配を感じさせます～ツルゴ～	第101号	2018年8月
最近では水田の中も「欧米が」が進んでいるんです～アメリカアゼナ～	第100号	2018年7月
手入れが行き届かないと、貧乏神のようなこの草に襲われるゾ!?～ヤブガラシ～	第99号	2018年6月
水辺で良くみかける黄色いアヤメの正体は踏合力の強いインペーダー～キショウブ～	第98号	2018年5月
春のアゼを代表するタンポポによく似た刈り取りに強い草～オオジシバリ～	第97号	2018年4月
寒天を仰ぐ縁起のよい冬性性のシダ～フユノハナワラビ～	第93号	2017年12月
晩秋の山野に咲く黄色い小花は、まるでありがたい薬師さまのよう～ヤクシソウ～(4)	第92号	2017年11月
刈り田によく見られる小さなヒマワリのような花～タウコギ～	第91号	2017年10月
毎年、この時期に現れ消えていくあの花は～ヒガンバナ～	第90号	2017年9月
とても乙女が口に出しては呼ぶことができないかわいそうな花～ヘクソカズラ～	第89号	2017年8月
びりりと空くはないけど、見向きもされずに消えていくのはイヤです～サンショウモ～	第88号	2017年7月

農村工学研究部門メールマガジン 購読申込はこちら
https://www.naro.go.jp/laboratory/nire/mail_magazine/index.html



チドメグサ	106	ミゾソバ	33
チャノキ	101	ムラサキツメクサ	64
ツユクサ	7	メリケンカルカヤ	13
ツリガネニンジン	69		
ツルボ	84	ヤ行	
ツルマメ	86	ヤエムグラ	63
ツワブキ	60	ヤクシソウ	77
ドクダミ	19	ヤナギタデ	85
		ヤブカンゾウ	31
ナ行		ヤブガラシ	82
ナズナ	27	ヤブラン	107
ナンテン	103	ラ行	
ニリンソウ	61	リュウノヒゲ	102
ネジバナ	53		
ノミノフスマ	14	ワ行	
		ワレモコウ	25
ハ行			
バイカモ	44		
フユノハナワラビ	78		
ハハコグサ	50		
ハボタン	70		
ヒガンバナ	76		
ヒツジグサ	55		
ヒナタイノコヅチ	24		
メヒシバ	57		
ヒメジソ	58		
ヒルガオ	54		
ブタナ	104		
フデリンドウ	71		
ヘクソカズラ	75		
ヘビイチゴ	62		
マ行			
ミズハコベ	39		
ミズマツバ	93		
ミズワラビ	23		

分布：関東地方以南

コセンダングサ

(キク科)

学名: *Bidens pilosa* var. *pilosa*

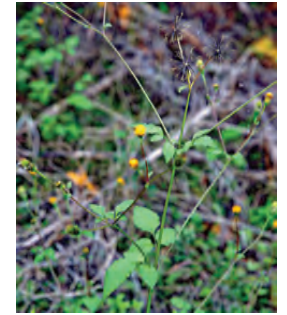
小柄種草 別名：ひつつきむし、三葉鬼針草

主な生育場所

路傍、田や畑の畦畔、畑地、牧草地、芝地、荒地や空き地、野原、河原などに普通にみられる。日の当たるやや乾いた場所によく群生するが、適応性が高く日陰の湿地環境でも生育できる。

特徴

江戸時代に伝播した熱帯アメリカ原産の一年草。細かい毛が生え、断面が4~6角形の茎は直立し、高さ約0.5~1m。3~5葉からなる複葉は下部で対生、上部で互生し、丸みを帯びた鋸歯がある。茎上部の枝先に、黄色の筒状花だけからなる頭状花をつける。果実はやや平たく4稜形。下向きのとげを並べた3~4本の芒がある。



名前の由来：樹木の柗(センダン)の葉に似ていることからセンダングサ。また類似種のセンダングサに比べ、花弁のない花が小さく見え、また葉も丸みを帯びることから小(コ)センダングサ。

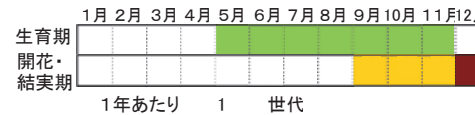
<農業との関係>

農地周辺に普通にある雑草で、同属で湿地を好むアメリカセンダングサと異なり水田内に入ることはないもの、畑地や果樹園で群生し、作物との水分・養分競合や収穫作業の障害を引き起こし強害雑草となることがある。コセンダングサの仲間は、衣服等にくっつきやすい果実が農作業に伴って農地に拡散されるので、その多くの種類が世界の暖帯から熱帯の農地で問題雑草となっている。



黄色の筒状花からなる頭状花(右)と果実(左)

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 湿地に生えるアメリカセンダングサの茎は赤みを帯び、頭状花の総苞片が目立ち、果実には2本の芒。似た環境に生育するセンダングサの頭状花には1~5枚の舌状花があり、小葉に不規則な切れ込みが出やすい。

<一言うんちく>

世界の温帯~熱帯に広く分布するコスモポリタンなコセンダングサは、種内変異も大きく、日本でも頭状花に白い舌状花があるシロバナセンダングサや白色の舌状花が1cm以上の大輪となるアウユキセンダングサなどの分布が知られ、沖縄県ではサトウキビ畑の大変な問題雑草となっています。



白色の舌状花が目立つ変種アウユキセンダングサ

<人との関わり合い>

果実は「ひつつきむし」として、服などにくっつくとなかなか取れないが、アメリカセンダングサと比較すると、芒(のぎ)の数は3~4本と多い(アメリカセンダングサは2本)もの、果実は細長い四角柱でつまみやすく、扁平なアメリカセンダングサの果実よりは衣服からはがしやすい気がする。

<俳句や短歌への登場>

センダングサの仲間は、「ひつつきむし」として昔から晩秋の野辺を代表する植物だが、残念ながら季語への登録はないようである。また草種名が6文字で語呂が良くないためか、俳句や短歌に詠われた例を知らない。

分布：東北南部以南

ウラボ

(ウラボ科)

学名: *Diplazium glaucum*

裏白 別名: シダ(歯染)

主な生育場所

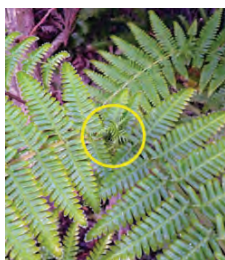
里山など主に低山地帯の林床などに生える。日当たりがよく乾き、貧栄養な場所を好む。疎林の林床や日の当たる斜面部でよく見られ、ときに大群落となる。山火事跡などにもよく見られる。

特徴

固い葉柄は直立し、その先に一对の葉を約120度の角度で広げる。葉は羽状に2回深裂し、長さ30cm~1mほど。表面は緑色だが、裏面は粉白色。二枚の葉の間から次年度以降、新たに葉柄を伸ばして一对の葉つけ、毎年葉の段を重ねていく。7月はじめごろ、葉裏の裂片中央脈の両側に黄緑色のソーラス(胞子葉群)を並べる。



葉の裏はその名の通り白い



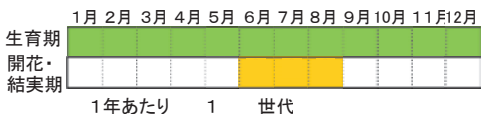
一对の葉の間から新たな一对の葉が展開

名前の由来: 葉の表面は非常につやがある緑色だが、裏側は粉を吹いたように白いことから。また元来、「歯染」(シダ)とはウラボを指す。

<農業との関係>

畑地や田内に生えることはないが、谷津田に接する山腹斜面に見られることがある。本州中部以西の里山ではよくみかけ、葉は1mと大きくなるので、野良仕事で一休みする際の敷物や、枯れ葉を焚き付け用に利用していたと思われる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> コシダはウラボと同じような環境に生え、葉裏も白く、一对の葉を展開しながら成長する様子もよく似ているが、コシダの葉は15~40cm程度とウラボより小型。またウラボの葉は羽状に2回深裂するが、コシダは羽状に1回深裂のみ。

<一言うちく>

ウラボが縁起物として重宝されるのは、葉裏の白さが、神様に対して裏表のない潔白で清廉な心を表しているからともされています。また花言葉は「無限に」。来年こそウラボにあやかって、心安らかに清い心持ちで平和な時間が続くことを願うばかりです。

<人との関わり合い>

毎年一对の葉を重ねていく様子や葉が垂れ下がる様子を「歯垂る(しだる)として長寿をイメージすること、また葉裏が白いことから代々白髪になるまで長生きするようにとの願いを込めて、古くから軒先の注連飾りやお供え餅のお飾りなどの縁起物として使われてきた。また、光沢のある葉柄は固く丈夫なため、編みカゴなどの材料としても利用される。

食用には適さないが、冬に地上部を採り、刻んで日干しにしたものは、利尿剤となる。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 新年】 歯染(しだ)はウラボのこと。

餅を夢に折むす歯染の草枕 (松尾芭蕉) 新年の山深く歯染はみどりなる (室生犀星)

名こそかはれ江戸の裏白京の歯染 (正岡子規) 裏白に齢かさねし父と母 (百合山羽公)

裏白のうらまで年の光かな (川瀬巴水) 裏白や父が飾れば青まさり (中村汀女)

索引

ア行

アキノエノコログサ	47
アキノノゲシ	94
アメリカアゼナ	83
アメリカセンダングサ	37
アメリカフウロ	52
イチョウウキゴケ	90
イスガラシ	48
イスタデ	11
イスタヌキモ	66
ウツギ	91
ウマノアシガタ	18
ウラボ	88
ウラボチチコグサ	97
オオイヌノフグリ	15
オオオナモミ	49
オオジシバリ	80
オモダカ	10
オランダミミナグサ	28

カ行

カズノコグサ	38
カタバミ	34
カナムグラ	21
ガマ	12
カラムシ	32
カワラケツメイ	67
カントウヨメナ	59
キキョウ	99
キシヨウブ	81
クコ	100
クサノオウ	42

クサネム	65
クズ	46
クログワイ	95
ゲンゲ	89
ゲンノショウコ	45
コウホネ	8
コセンダングサ	87
コナギ	98
コナスビ	72
コニシキソウ	92
コハコベ	30
コマツヨイグサ	105
コメツブツメクサ	73
コモチマンネングサ	43

サ行

ザクロソウ	56
サンショウモ	74
ジュンサイ	108
シロザ	35
シロバナサクラタデ	22
スイバ	29
スギナ	17
ススキ	36
スベリヒユ	9
セイタカアワダチソウ	68
セイヨウアブラナ	41
セリ	20

タ行

タガラシ	16
タウコギ	79
タコノアシ	26
タチツボスミレ	51
タネツケバナ	40
チカラシバ	96

分布: 全国

ジュンサイ (スイレン科)

ブラセニア シュレベリ
学名: *Brasenia schreberi*

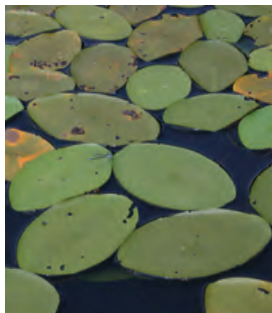
草 菜 別名: ヌナワ(沼縄)、ぬなは、ネヌナワ(根沼縄)、みずどころ、馬蹄草

主な生育場所

多量の腐植質を含み、水色が褐色を帯びるような腐食栄養または栄養塩が少ない貧栄養な湖沼やため池に生育。ときに中栄養な環境にも見られるが、富栄養下では生育しない。流水中にも生えない。

特徴

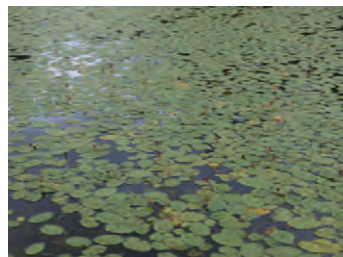
多年生の浮葉植物。やや堅い地下茎が地中を匍匐し、節から葉柄を伸ばしその先に盾状に長さ5~15cm、幅3~8cmの楕円形の葉をつける。葉裏は赤紫色。若芽や葉柄、葉の裏は透明な寒天質の粘液に覆われる。夏に葉脇から花柄を伸ばし、先に径約1.5cmの暗赤色の花を水面上に咲かす。果実は細長く、1~1.5cmほど。



名前の由来: 漢名「蓴」の発音「チュン」がなまって「ジュン」となり、水菜なので菜をつけてジュンサイ。また別名は、茎が縄のように長くてぬめぬめすることから滑る(ぬめる)縄、略してヌナワ。

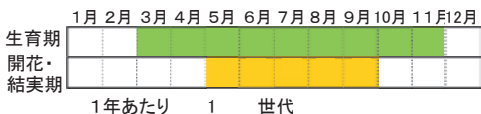
<農業との関係>

独特のぬめりを持つ若葉や茎は日本料理の食材として利用され、湖沼だけでなく水田や休耕地で栽培されることもある。とくに水温が低い東北地方の秋田県、青森県、山形県で生産量が多い。栽培は水田を掘り下げ60cmほどの水深を保ち、6~7月に苗を植え付け、3年目以降の6~8月に若芽を収穫する。なお、食害する害虫にはジュンサイハムシやトラフユスリカなどが知られている。



ジュンサイとヒツジグサが混生する池

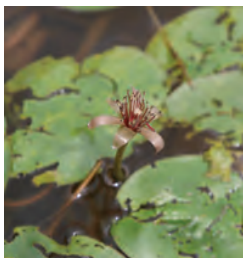
<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 湖沼で混生することもあるオヒルムシロやフトヒルムシロの浮葉は葉端から葉柄につながる。また、ジュンサイと同様に葉柄が盾状につくヒツジグサ(15年7月号で紹介)やマルバオモダガ、アサザなどの葉の基部は大きく切れ込んでいる。

<一言うちく>

京言葉で「じゅんさいをお人やわあ」とは、どちらつかずでつかみどころがない人を遠回りに指す場合に使うようです。一方、ジュンサイは除草剤の影響を受けやすく、除草剤の含まれた用水が混入すると枯れてしまうため、水質のセンサーとしては、とてもはつきりした水草なのです。



淡い暗赤色の花披片6枚の花

<人との関わり合い>

若芽はガラクトマンナンを主成分とする寒天質に覆われ、独特の風味が食材として珍重されてきた。各地の産地では若菜の瓶詰めなどが販売されている。若菜は軽く水洗い後、湯に通し冷水で締め酢の物や、吸い物・味噌汁の具、天ぷらなどで楽しむ。また、乾燥した茎葉には解熱や利尿作用もある。浮葉や葉柄の生のしぼり汁は腫れ物にも効くとされ、各地で利用されてきた。しかし、池沼の開発や富栄養化などで各地で消え、現在26の都府県で絶滅危惧種に指定されているほど減少している。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

わがこころ ゆたにたゆたに 浮きぬはな 辺にも沖にも 寄りかつましじ(万葉集・作者未詳) ※ぬはな=ジュンサイ
尊菜や一鎌入る浪の隙 (広瀬惟然) 青田より水の高さや蓴(じゅんさい)沼 (高浜虚子)
尊菜を 掬へば水泥 掌にあまり 照り落つるなり また沼ふかく (北原白秋)

分布: 全国

ゲンゲ (マメ科)

アストラガルス シニクス
学名: *Astragalus sinicus*

蓮 華 別名: レンゲ、レンゲソウ、テンマリソウ、ゲゲバナ、ミコシソウ、紫雲英、翹揺

主な生育場所

耕作前の水田、休耕地、田畑の畦畔、法面草地、河川敷など。湿った場所を好むが、長時間冠水するような湿地には生えない。また日陰でも生育できるが、よく日の当たる場所で大きな群落となる。

特徴

下部は地面を這い、上部は斜上し10~25cmの高さとなる越年草。茎の断面は四角形で柔らかく、有毛で根元からよく分枝する。葉は互生し、9~11枚の小葉からなる奇数羽状複葉で小葉は倒卵形で円頭あるいは凹頭。10~20cmの花柄の先に紅紫色の蝶形花を輪状につける。果実は黒熟し、長さ2~3cm。種子は勾玉形で茶褐色。



名前の由来: ゲンゲとは漢名の「翹揺」の音読み由来。また、春先に伸ばした花茎の先につける7~10個の輪状の花の様子を仏様が乗る「蓮華」(ハスの花)の座に見立てて、レンゲ。

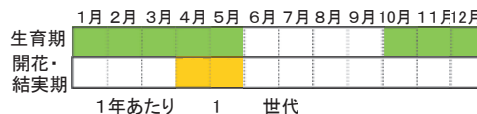
<農業との関係>

古来から緑肥や飼料として各地で栽培されてきた。とくに化学肥料が登場するまでは、窒素固定能が高い根粒菌をよくつけ、毎年自生するゲンゲは水稲休閑中に土壌を肥やすことのできる優秀な緑肥であり、10aあたり5kg以上の窒素を供給することができた。しかし、化学肥料の普及や田植えの早期化による生育盛期と結実期前の耕うんにより、急速に春の水田から姿を消していった。



水田に緑肥として栽培されるゲンゲの開花期

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 春の水田で似たような植物は見当たらない。同じ豆科のヤハズエンドウ(カラスノエンドウ)も羽状複葉だが、小葉の幅は狭く、小葉数もゲンゲより多く、偶数枚となる。また蝶形花を同じように頭状につけるシロツメクサの花の色は白い。

<一言うちく>

ゲンゲは、日本産の草花ではなく、奈良時代頃に中国から緑肥や飼料用に導入された帰化植物です。その後、春の水田の風物詩となるほど日本の風土に馴染み、和歌や俳句などにも多く詠われています。しかし、緑肥や飼料用のゲンゲ種子の生産はいまだ中国で行われることも多いのです。



花茎の先に蝶形花7-10個を輪生

<人との関わり合い>

緑肥や飼料用に栽培されるほか、ミツバチの良質な蜂蜜を提供する蜜源植物として養蜂家にもよく利用されている。また、水稲不耕起栽培と組み合わせると、水稲移植前後の雑草抑制にも利用されることも。各地の休耕地等に鑑賞用にも栽培される。若葉や花は食用となり、花付きの茎を姿揚げにしたり、花と蕾を酢を入れた熱湯にくぐらせ三杯酢で食べたりする。開花期に採取し天日乾燥したものは、咳やのどの痛みなどに効くとされ、民間ではうがい薬等にも使われることがある。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 春】

手に取るな やはり野に置き 蓮華草 (滝野 瓢水) 胸までの紫雲英仔犬は迷ひゆく(中村 草田男)
野道行けばげんげんの東すてゝある(正岡 子規) げんげんを打ち起したる瘦田かな(正岡 子規)
春の田はまただたがやさずれんげさうあぜのさかひもあらず咲きたり(三ヶ島 霞子)
赭土(あかつち)の山の日かげ田にげんげんの花咲く見れば春たけにけり(島本 赤彦)

分布: 全国

イチョウウキゴケ ウキゴケ 科

学名: *Ricciocarpos natans*

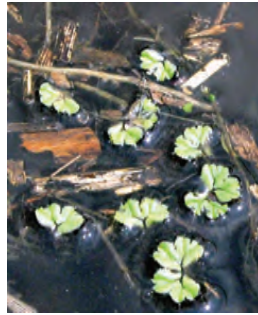
銀杏浮き苔 別名: イチョウウキクサ, イチヨウモ, ムラサキイチョウゴケ

主な生育場所

水田やため池, 流れの穏やかな水路など。水面を浮遊するため, 流れのある河川ではワンドなど水がよどんでいるような場所で見られることもある。また, 湿地などの泥上では陸生形でも生育できる。

特徴

水面を浮遊する苔類。多年草で肉厚の葉状体をもつ。春先から晩秋にかけて赤みを帯びた緑色で長さ10mm幅5mmほどの肉厚で扇形の葉状体を分裂し増殖する。裏側には紫色の鱗片を根状に伸ばす。水田では湛水期間中に葉状体中央部に胞子体を形成する。落水以降, 葉状体裏側から仮根を下ろし, 陸生形で越冬する。

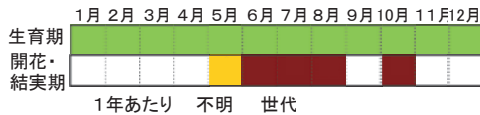


名前の由来: 水面を浮遊するコケで, 葉状体(葉のように見える部分)が扇形に広がり表面には葉脈のような浅いしわができることから, 銀杏(いちょう)の葉に見立て銀杏浮き苔。

<農業との関係>

冬期でも冠水したり, 土壌が乾きにくい湿田, 半湿田に多く見られたが, 乾田化や除草剤の影響等により, 一時ほとんど見られないほど減少し, 絶滅危惧I類に指定されていた。しかし, 最近では無農薬水田以外でも各地で見られる機会が増えてきており, 2007年度版のレッドリストでは準絶滅危惧に格下げされた。しかし, まったく見られない地域もあり, その原因はいまだ不明である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



中干しによる落水期に着土したイチョウウキゴケ

<類似種> 同じウキゴケ科に属するウキゴケ(カツノゴケ)は, 水面ではなく水中を浮遊する。また葉状体は白緑色で厚みはなく, 二股に分枝する。ハタケゴケはよく似た肉厚の葉状体をもつが, 規則的に二股分岐して円形ロゼット状となる。

<一言うち>

イチョウウキゴケは日本で唯一の水面を浮遊するコケですが, かつてはどの水田でも見られた普通の水田雑草でした。しかし, いつの間にか各地で姿を消し, 一時はその実態が謎わしい(虚仮)ほど少なくなりました。最近, 復活傾向にありますが, 決してこけおどしとなりませぬように。



ウキクサと混生

<人との関わり合い>

食用や薬用としての利用の記録は見当たらない。しかし, イチョウウキゴケは除草剤に対して感受性が高いと考えられることから, 最近, 水生植物に対する農業の影響評価用の材料としての検討も始まっているようである(FAMIC広報誌No.54 2018年秋号より)。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 不明】

「苔(こけ)」は, 「苔青し」「苔茂る」「苔の花」(いずれも夏の季語)のように俳句や短歌などにはよく取り上げられる題材だが, かつては水田でよく見られた水面を浮遊する唯一の苔であるイチョウウキゴケに関しては誰も関心がなかったようである。田んぼの観察会では見かけることも多くなったので, もっと注目されてもよい水草の一つといえよう。

分布: 全国

ヤブラン (キジカクシ 科)

学名: *Liriope muscari*

藪 蘭 別名: サマームスカリ, ノシメラン, ジャガヒゲ, テッポウダマ, ネコノメ, 麦門冬

主な生育場所

林内の林床や藪(やぶ)などの木陰となるような場所。畦畔や樹園で見られることもある。庭先に植栽されることも多い。日陰を好むが, 日がよく当たる場所でも生育する。貧栄養な環境や乾燥にも強い。

特徴

多数の葉が根生し30-60cmほどの高さの大きな株となる多年生。線形の葉は濃緑色で厚く光沢があり, 幅約7-12mm。夏から秋にかけて株間から多くの花茎を30-50cmほど伸ばし, 穂状に径7mmほどの淡紫色の6弁花を多数つける。花終に径5mmほどの光沢のある球形の種子をつけ, 最初緑色だが熟すと黒色となりよく目立つ。

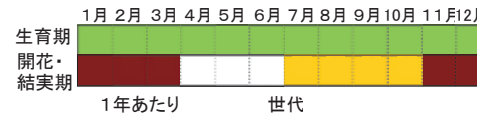


名前の由来: 低木や笹などが密集したやぶでよく見られ, 葉が蘭に似ていることから。また, 葉も茎も火熨斗(ひのし: 昔のアイロン)で熨(の)したように平たいことから熨斗目蘭(のしめらん)。

<農業との関係>

日陰となるような水田畦畔などに見られることがあるが, 農地には入らず, また畦畔管理の邪魔とならない。一方, 近年, ヤブランが他の雑草の発生を抑制する効果が高いことが報告され, 畦畔などで被覆植物(カバープランツ)としての可能性が高まっている。

<生活史> 関東地方の例(目安)



木陰では葉はまばらになり, 花付きも悪くなる

<類似種> ジャノヒゲ(2020年11月号で紹介)の葉は幅2~3mmと狭く, 花序はまばらで, 果実は鮮やかな瑠璃色。日当たりのよい場所を好むツルボ(2018年8月号で紹介)の葉も細く, 葉の枚数は少なく, 花は径7mmと小さく雄しべがよく目立つ。

<一言うち>

本陰にひっそりと咲くヤブランですが, ヤブランに含まれるアゼチジン-2-カルボン酸という物質が, 他の植物の生育を阻害する効果が高いことが報告されました。花言葉にあるように「忍耐」「謙虚」だけでなく, 他の植物に負けなしたたかさも持ち合わせているのですね。



穂状に6弁花を多数つける

<人との関わり合い>

夏から秋の長い期間に穂状に咲く淡紫色の花を楽しむだけでなく, 年間を通じ濃緑で丈夫な植物のため, 「ノシメラン」の名で古くから庭園などに観賞植物として利用されてきた。近年ではガーデニング素材としても人気があり, 白や斑入りの葉など品種も豊富である。また, ジャノヒゲと同様, 肥大した塊根を水洗いし天日で乾燥させたものは漢方で「麦門冬」と呼ばれ, 高血圧や鎮咳, 解熱, 滋養強壮などに効くとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 初秋】 ※万葉集で詠まれる「山菅」はヤブランやジャノヒゲを詠んだものともされている。

山川の水蔭(みかげ)に生(お)ふる山菅(やますげ)の やまはず妹は思ほゆるかも (柿本人麻呂: 万葉集)
衣熨斗目蘭祝のころは紫に (後藤比奈夫) 雁のわが家わたりめ熨斗目蘭 (岡井省二)
藪蘭のうすむらさきに長命寺 (山尾玉藻) 門までの藪蘭につがやいてゐる (折井紀衣)

分布：北海道を除く全国

チドメグサ (ウコギ科)

学名: *Hydrocotyle sibthorpioides*

止血草 別名：ゼニクサ、チョウチングサ、ウズラグサ、カガミグサ

主な生育場所

水田の畦畔、路傍、庭先、芝地、野原など、やや湿った環境下で見られる。刈取りや踏みつけにも強く、開けた明るい環境や被陰された場所でも見かけるが、植物に完全に覆われる環境は好まない。

特徴

茎はよく分枝して地をはう多年生。節からひげ根をだして繁殖する。表面に光沢のある葉は互生し、直径1~1.5cmの円形で掌状に浅く裂ける。基部は心形。葉は浅く裂け、さらに3~5個の歯牙がある。葉腋から長さ0.5~1.2cmの短い花柄を伸ばし、先に帯緑色の花を10数個つける。花序は葉より短い。果実は直径1mmの扁球形。



浅い切れ込みの光沢のある葉が特徴

名前の由来：水田や沼などでヒルに吸われたときに、葉を揉んで患部に貼り付けると血が止まることから。別名の銭草(ゼニクサ)は丸い葉の形がお金に似ていることから。

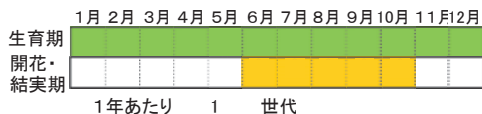
<農業との関係>

やや日陰の湿った果樹園では一面に覆ってしまい害草となることがある。また、芝地に生えたと刈り払いで防除できずに、芝生を覆ってしまおうと芝生の生育を悪化させる。刈取りに強く、チドメグサで覆われてしまうと他の草が生えにくくなることから、水田の畦畔では意図的にチドメグサを優占させるように誘導する場合もある。なお、湛水や耕耘には弱いのでは田内に生えることはあまりない。



空き地に見られる群落

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 葉の切れ込みが深く、基部はV字形に開くのがノチドメ。オオチドメの葉は直径1.5~3cmと大きく、花序は葉の位置よりも高く伸びる。また、ヒメチドメは葉の直径0.5~1cmと小さく深く切れ込み、基部はV字形に開き、花も2~4個と少ない。

<一言うち>

チドメグサはかつてセリ科に属していましたが、最近の分類ではウコギ科に編入されました。ウドやタラノキ、コシアブラなど野菜や山菜として利用されるものが多く含まれるウコギ科ですが、今後さらにチドメグサの分類的位置づけが変わる可能性があります。



葉は深く切れ込み、基部がV字に大きく開いたヒメチドメ

<人との関わり合い>

チドメグサの仲間には収斂作用による止血成分が含まれ、止血の民間薬として古くから利用されてきた。一般的な方法は、葉をよく洗い、揉む、磨り潰すなどして外傷部(擦過傷や切創などの出血性外傷)に塗布する。葉を洗ったあと乾燥すれば、生薬のように服薬して用いることができる。食用に関しては記録がない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】 オトギリソウ科のオトギリソウも別名、止血草と呼ばれ、オトギリソウを指している可能性がある。明方の滝のよき音止血草 (飯田龍太) 首塚の影のうごかぬ止血草 (渡辺 昭) 抜くたびに殖えてゐるなり止血草 (富沢みどり)

分布：全国(北海道南部以南)

ウツギ (アジサイ科)

学名: *Deutzia crenata*

空木 別名：卵の花(ウノハナ)、雪見草

主な生育場所

里山の日当たりのよい林縁や路傍、崖地などに生える。溪流沿いなど川辺にも多い。また、人家の庭先や生け垣、所有する畑や水田の境界部に目印用に植栽することもある。

特徴

樹高1~3mほどで株立ちする低木。葉は対生し、若枝は赤褐色で星状毛がある。縁に微細な鋸歯があり長さ4~9cm、幅2.5~3.5cmほどの楕円形~卵状披針形の葉は対生する。葉の両面や葉柄にはやや密に星状毛をしく。5~7月に枝先に下向きの白色の花を多数つける。花後、椀形で花柱が残った果実をつけ、晩秋に熟す。



開花期にも前年度の果実が残る

名前の由来：幹や枝を折ると、中空であることから空(うつろ)なる木ということでウツギ(空木)。また卵の月(旧暦の4月)に咲くことから卵木とされたともいう。

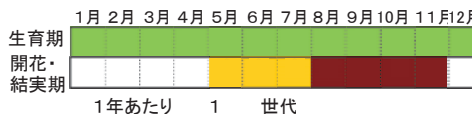
<農業との関係>

里山によく見られる清楚な白いウツギの花は邪気を払うと考えられ、生け垣や畑の境界などに植えられてきた。また、開花期が田植えの時期にあたるため、今でも東北地方を中心に水田の水口に花のついたウツギの枝を差し、イネに邪気が宿らないように祈る風習が残る。たくさんの枝を水口に差し、枝先に密生して咲くウツギの花をたわに植えるイネの穂に見立てて豊作を願ったともされる。



花弁は5枚。花弁よりやや短い雄しべが10本ある

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 関東地方以西には4月ごろから咲き始め、小振りな花がつくヒメウツギが河川沿いの崖地などに見られる。またやや標高の高い山地に育つマルバウツギの葉は卵形で丸い。バイカウツギの花はウツギより大きく芳香があり、花弁は4枚。

<一言うち>

中空の幹をもつ低木は「ウツギ」と呼ばれることが多く、今回取り上げたアジサイ科のウツギの他に、淡紅色~赤色の花をつけるスイズラ科のタニウツギや、小降りの花のバラ科のコゴメウツギ、また有毒植物のドクウツギなど多数あり、いずれも里山に身近な植物となっています。



梅雨時の林縁を彩るウツギ

<人との関わり合い>

初夏に咲く清楚な卵の花は、万葉歌人の大伴家持が好んで詠んだように、古来からよく知られ、詩歌にもよく取り上げられてきた。同じ初夏の季語であるホトギスとともに詠われることも多い。唱歌「夏は来ぬ」の冒頭にも「卵の花の匂う垣根に」と取り上げられている。また、関東地方などでは豆腐の絞りかすである「おから」を「から(空)」を連想し縁起が悪いとし、「おから」と同様に白く、小さな花をたくさんつけるウツギの花に喩え「卵の花」と呼ぶ。ただし、ウツギ自体は食材として適さない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：初夏】 卵の花の過ぎば惜しみか霍公鳥雨間も置かずこゆ鳴きわたる (大伴家持) なく声をえやは忍ばぬほととぎす初卵の花の影にかくれて (柿本人麻呂) 卵の花をかざしに関の晴着かな (河合會良) 卵の花や神と乞食の中に咲 (小林一茶) 卵の花のこぼる露の広葉かな (与謝蕪村) 卵の花は日をもちながら曇りけり (加賀千代女)

分布：全国

コニシキソウ (トウダイグサ科)

カマエサイセ マクラータ
学名: *Chamaesyce maculata*

小錦草 別名：アカクサ、チチクサ(乳草)

主な生育場所

畑地や芝地、路傍、裸地、庭先などに普通に見られる。日当たりの良い環境に多い。また湿り気のある場所でも生育するが、乾燥に非常に強く、砂礫地など植物が生育しにくい環境にもみられる。

特徴

地面にへばりつくように生える北米原産の小型一年性。全体に白い伏毛が多く、地上を這う茎は長さ20cmほどで切ると白い乳液を出す。葉は対生で長さ5~13mmの長楕円形、上部に浅い鋸歯、中央部に暗紫色の斑紋がある。6~11月ごろ葉腋に花弁のように見える4個の小さな付属体を持つ花をつける。果実には種子3つが入る。



名前の由来：在来で同属のニシキソウ(高さ10~20cmほど)に似て小型の植物であることから、牧野富太郎博士が日本に侵入後の1895年にコニシキソウ(小錦草)と名付けた。

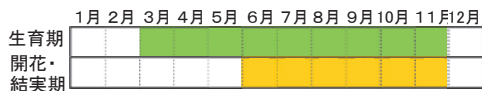
<農業との関係>

夏作の畑にも生え、秋遅くまで生育するが、小型の植物であるため優占する場合は除いて、雑草害はほとんど生じない。作物の根が入りにくいほどの固い土壌では優占してしまうことがある。地面にへばりつくようにして生えるので、手取りでの除草は困難だが、除草剤を運用するなど管理強度の高い水田畦畔では増えてしまう。湛水環境には見られないので、水田雑草とはならない。



四方八方に茎を伸ばし地面を這う様子

<生活史> 関東地方の例(目安)



1年あたり 1~2 世代

<類似種> 在来のニシキソウの葉は長さ7~15mmとやや大きく、コニシキソウよりも茎が赤みを帯び、全体に毛が少なく葉に斑紋は出ない。北米原産の帰化植物オオニシキソウの葉は15~35mmとさらに大きく、茎は立ち上がり高さ40cmほどとなる。

<一言うち>

コニシキソウを観察するとアリがたかっていることがあります。アリは雄しべや雌しべのもとにある蜜腺から出る蜜が目当てで、蜜を集める際に頭に付く花粉を運んでくれます。餌としてアリが運ぶ種子も生育地の分布拡大に貢献します。コニシキソウは巧みにアリを利用しているのです。



葉腋ごとに花をつける

<人との関わり合い>

コニシキソウやニシキソウは背の高い草などに覆われてしまう場所は苦手で、裸地のような環境を好み、刈り込みに強く短期間で生育するため、畑や畦畔、芝生内などよく管理されている環境を好む雑草として馴染み深い。しかし、小型の植物のため、これまで積極的に食用などに利用された事例は聞かない。また、九州地方以南に見られる近縁のシマニシキソウについては皮膚炎や水虫、たむしなどの民間薬として利用された記録はあるが、コニシキソウの薬効については知られていない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：不明】

ニシキソウやオオニシキソウも含めて、小型で地味な植物のため、これまで詩歌に詠まれることはなかったようである。

分布：北海道を除く全国

コマツヨイグサ (アカバナ科)

オエノテラ ラキニアータ
学名: *Oenothera laciniata*

小待宵草 別名：キレハマツヨイグサ(切れ葉待宵草)、ツキミソウ(月見草)

主な生育場所

路傍や荒地、庭先、畦畔、土手、河原、海岸などの明るく乾いた場所に生育する。砂地を好み、砂浜や砂丘によく見られるが、冠水する環境には生えない。畑地内や樹園下にも見られることがある。

特徴

北米原産の外来種。生育条件によって越年草にも二~数年草にもなる。地面を這うことが多いが、斜上し草高50cmほどに達することもある。茎や葉に開出毛があり、葉は羽状に中深裂する。4月から11月にかけて、葉腋に径1~2.5cmほどの淡黄色の4弁花をつけ、しおれると黄赤色に変わる。円柱形の果実には短毛が生える。



名前の由来：マツヨイグサの花は夕方になると開き、翌朝に萎むので、宵(よい)を待って花が咲くということで待宵草。マツヨイグサの仲間うちで本種は花が小さいので小待宵草。

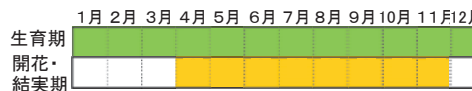
<農業との関係>

刈払いで管理される乾いた休耕地などで群落化することがある。基盤整備などで造成直後や低位置での刈取頻度が高く裸地化している畦畔にもよく見られる。耕起に弱く、よく耕されている畑地内には定着しにくい。アメリカでは不耕起栽培の普及による増加が報告されており、耕起が少ない畑や明るい果樹園下で増殖し雑草化することがある。



地面を這って広がっている株

<生活史> 関東地方の例(目安)



1年あたり 越年1 世代

<類似種> 日本に帰化するマツヨイグサのうち、地を這い、葉に大きな切れ込みがあり花の直径が2~2.5cmであるのはコマツヨイグサだけ。他のマツヨイグサやメマツヨイグサ、オオマツヨイグサは直立し、葉は切れこまず花の直径は3~5cmと大きい。

<一言うち>

夜に咲くマツヨイグサの花は、主に夜行性の蛾によって受粉されています。そのため、蛾の長い口に対応し蜜腺は花の下部に伸びる筒状の部分の奥にあり、花粉はフモの糸のように繋がりが、鱗粉のためハチなどに比べて付着しにくい蛾の羽にうまく絡まりやすくなっています。



四弁花は夕方開花し、翌朝に萎む

<人との関わり合い>

美人画で有名な竹久夢二が「待てど暮らせど来ぬ人を 宵待ち草のやるせなさ 今宵は月も出ぬぞうな」と詠った「宵待ち草」はマツヨイグサのこととされる。夜咲く黄色い花で夜目にもよく目立つことから観賞目的で導入されたが逃げ出し、各地で雑草化している。とくに鳥取砂丘など海浜で繁茂し、在来の植生に大きく影響を与えるため、生態系被害防止外来種に指定されている。花は夕方に摘み、天ぷらなどで食べられる。また、マツヨイグサの仲間には咳止めや健胃に効果があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

かの母子の子は寝つらんか月見草(中村草田男)とびかかろ焔炉の火の粉月見草(富安風生)
破船埋もれ待宵草を点す闇(佐藤鬼房) 花引きて一たび嗅げばおとろへぬ少女ごころの月見草かな(与謝野晶子)
霜あれの庭にしじまり青々と待宵草のもと株ふたつ(鹿児島寿蔵)

分布: 全国

ブタナ (キク科)

豚菜 別名: タンポポモドキ

ヒポコエリス ラディカータ
学名: *Hypochoeris radicata*

主な生育場所

道端、野原、空き地、庭先、水田の畔、法面草地、畑、芝地、果樹園、牧草地など明るく乾いた環境によく見られる。草刈りがよく行われる場所に多く、やぶのような草刈りの少ない場所には見られない。

特徴

ヨーロッパ原産の多年草。葉は根生し、タンポポの葉のように分裂する。両面に黄褐色の硬い毛が密生する。4月ごろから花茎を高さ50cm程度まで伸ばし、上部で数本に枝分かれた先に径3~4cmほどの舌状花のみからなる頭花をつける。花後はタンポポのように冠毛をつけたそう果となり、表面には細かい突起が密生する。



花茎は枝分かれし2~3個の頭花をつける

名前の由来: 本種は原産地のフランスで「salade de pore(豚のサラダ)」と呼ばれており、それを直訳したもの。別名の「タンポポモドキ」とは、外見がタンポポによく似ていることから。

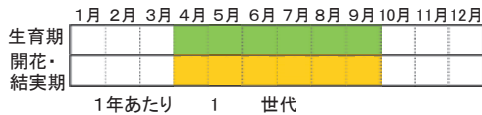
<農業との関係>

タンポポと同様に直根を地面深く伸ばすが、耕起には弱いため、畑や水田で問題となることは少ない。他の植物よりも刈り取り圧に強いので、果樹園や芝地では群落化してしまうことがあり、特に芝生を産する畑ではブタナの群生によって芝生が刈れてしまうため、強害草として扱われる。



切れ込みが深く硬い毛が密生するロゼット葉

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> タンポポの仲間は、花茎が枝分かれせず茎頭に頭花を一つだけつけ、葉にはほとんど毛が生えない。同じくヨーロッパ原産のヒメブタナは、全体的に小型で毛も少ない。

<一言うち>

セイヨウタンポポの増殖力も旺盛ですが、ブタナも環境に対する適応性が高く、都市部から農村部、海浜から高山帯まで広く分布を抜けています。踏みつけや刈り取りにも耐性があり、類似種のヒメブタナなどの雑種も報告されており、すでに全国各地で初夏の風景の一部になりつつあります。



タンポポによく似た頭花

<人との関わり合い>

植物体全体が食用となり、ヨーロッパなどではポイルされた葉を野菜のように食べているようだ。タンポポ同様に苦みはあるものの、若葉は苦みが少なく、サラダ、茹で野菜、揚げものなどにすると美味しい。成長が進んだ茎葉部は硬く、あまり食されない。根もタンポポと同じく、コーヒーの代替品として炒ってハーブティーとして利用される。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 不明】

昭和初期に帰化してからまだ間もないため、俳句や短歌などへの登場は見ない。

分布: 北海道を除く全国

ミズマツバ (ミソハギ科)

水松葉 別名: とくになし

ロタラ マキシカナ
学名: *Rotala mexicana*

主な生育場所

水田や休耕田、湿地に見られる。とくに草丈が低く、開放空間が確保されているような場所に多い。湛水下でも生育可能だが、日光が届かないような水深では見られない。

特徴

高さ3~10cmほどの小型の一年草。全体柔らかく、茎は赤色を帯び、下部で枝分かれて地面をやや這うが、その先は立ち上がる。長さ5~10mm、幅1.5mmほどの柄のない葉を3枚、ときに4枚を輪生。花は葉脇に淡紅色の5枚の半球形のがくからなる花を単生。果実は0.8~1mmの球形で、成就すると3裂し、多数の微小種子を出す。



名前の由来: 線形で柄のない葉が左右に広がる様子を松葉にたとえて、水中で生育することから、水松葉(ミズマツバ)。

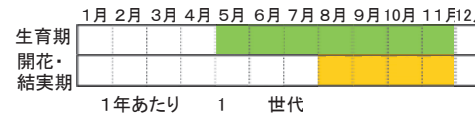
<農業との関係>

水田という環境によく適応してきた水田雑草の一つ。本田の中だけに生育し、畦畔や水路にはほとんど見られない。関東地方以西では、かつて大発生するほ場も多く、水稻の強害雑草となっていた。最近では除草剤の普及などで各地で減少しているが、同属の水田雑草キカシグサと同様、スルホニルウレア(SU)系除草剤に対しての抵抗性型の出現が報告されている。



葉腋に球形の果実をつける

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 水田に生育する同じ小型種のキカシグサの葉は対生し、やや厚みがあり、幅3~4mmと広く丸みを帯びる。関東以西に稀にみられるヒメキカシグサは高さ2~7mmとミズマツバより小型で、丸みのある葉は対生で幅1.5~4mm。

<一言うち>

各地で減少しているミズマツバ。しかし、目立たない小型の植物なので分布実態がよく分かっていない側面もあり、母念に田んぼの中を探すと各地で比較的に見つけやすい絶滅危惧植物でもあります。ミズマツバは稲刈り後の刈り田で、田んぼの宝もの探しにはうってつけの題材なのです。



葉は3~4枚輪生

<人との関わり合い>

各地の水田に普通に見られた水田雑草だが、目立たず食用や薬用などの記録もないことから、その存在を認識する農家は少ない。除草剤やほ場整備による乾田化の進行などによって、近年、各地の水田で激減し、絶滅危惧種に指定する地域も多く(環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類, レッドリスト指定: 37都道府県)、やがて人知れず水田から消え去ってしまうかも知れない。ただ、最近では、海外の近縁種も含め、水槽のなかの鑑賞用の水草としてある程度支持されており、売買されることもある。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 不明】

水田に生える目立たない小さな植物で、とくに利用もされてこなかったことから、これまで詩歌等に取り上げられることはなかった。

分布：全国

アキノノゲシ (キク科)

ラクツカ インディカ
学名: *Lactuca indica*

秋の野芥子 別名：乳草(ちぢぐさ)、ウマゴヤシ、ウサギグサ、ホソバアキノノゲシ

主な生育場所

野原や道ばた、田畑の畦畔、畑、樹園地などに生える。日当たりがよくやや乾いた場所を好む。刈取りにも強く、草刈りがよくなされ、他の大型植物に覆われていない肥沃な場所に多く見られる。

特徴

越年草ときに数年生存する。全体無毛で茎は直立し高さ0.5~2mに達する。切り口から白い乳液が出る。葉は互生で柔らかく茎を抱き、普通、下部の葉は羽状に裂ける。茎の上部に円錐状に直径約2cmで淡黄色まれに白色の舌状花だけからなる頭花を多数つける。黒色の種子は長さ約5mmで長い冠毛をつけ、風散布される。



名前の由来： 葉の形や花の形が主に春に咲くノゲシ(ハルノゲシ)に似ていて、秋に花が咲き出すので、秋のノゲシ。また、別名の乳草は葉や茎を切ると、白い乳液が出ることから。

<農業との関係>

南アジア、東南アジア、東北アジアにかけて広く分布し、稲作の伝播とともに附随して日本へ渡って来た史前帰化植物の一つとされる。草刈り頻度の低い樹園地や、畑地で除草しにくい株間に生えると大株となり、密生すると雑草害を引き起こす。しかし、耕起に弱く、また草刈りによって草高が抑えられるため、耕起や草刈り頻度が高いと害草化することは少ない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



直径2cmほどの淡い黄色(クリーム色)の頭花

<類似種> ノゲシは春先から花が咲き始め、花色は黄色で葉の基部は三角形。秋に咲くヤマニガナやヤクシソウは山地に生え、アキノノゲシより舌状花数が少ない。また、コウゾリナには全体に剛毛が生え、葉は羽状に裂けない。

<一言うち>

アキノノゲシ属 (*Lactuca*) には、野菜のレタスも含まれます。レタスもアキノノゲシと同様に西アジアを原産とし、レタスのヘタを切ると同じように乳液が出ます。また、レタスの中には苦み強いものがありますが、アキノノゲシの茎をかじってみると、やはり苦いことがわかります。



下部の葉は羽状に大きく裂ける

<人との関わり合い>

アキノノゲシの変種で葉の切れ込みがなく前縁の細い葉となるリュウゼツサイ(竜舌菜)は食用や飼料となり、中国や台湾で利用されている。日本にも昭和初期に鶏の餌として導入されたが、今は栽培はほとんど見かけずに、各地で野生化している。アキノノゲシも食用となり、苦みの少ない春先の若芽はサラダになる。6月以降は苦みが強くなるため、塩茹でして水に晒し、お浸しや油炒めなどにする。また、民間療法では、胸やけや皮膚病の薬と利用されていた記録がある。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋？】

農村に一般的な草花で、秋に背高くたくさんの花を付ける様子には風情があり、また大きく羽状に裂ける葉も目立ち、それなりに目にとまる花だと思っただが、名前が6文字と中途半端であることもあってか、俳句や短歌に登場する例は見かけず、季語の設定もないようである。

分布：本州・四国・九州

ナンテン (メギ科)

ナンディナ ドメスティカ
学名: *Nandina domestica*

別名：南天竹(ナンテンチク)、南天燭(ナンテンシヨク)、ナルテン、ナツテン

主な生育場所

公園や庭木などに鑑賞用として植栽される。関東以西の暖地では山地の溪流沿いなどに自性する。半日陰を好み、強い西日が当たるような場所を嫌う。また、水はけの良い土地を好む。

特徴

中国原産の常緑の低木で樹高は1~3mほど。株立ちし、分枝せずにまっすぐ伸びる。直径2~3cmほどの幹の先端に羽状複葉を互生する。初夏に円すい状に花序を伸ばし、白い六弁花を多数つける。径6~7mmほどの丸い果実は晩秋から初冬にかけて鮮やかな朱色に熟す。果皮は薄く、中に1~2個の白い種が入る。

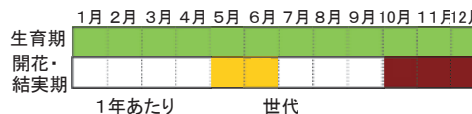


名前の由来： 冬に目立つ赤い果実に野鳥が集まることを食堂の灯火(中国名で南天燭(ナンテンチウ))に見立てた。また葉が竹に似ることから南天竹とも呼ばれ、これらを音読みしナンテン。

<農業との関係>

ナンテンの実が真っ赤に熟するのは二十四節季の大雪(12月7日ごろ)のころで、雪国では収穫した野菜を保存するために雪の中に埋める作業を行う目安となる。また、石川県奥能登地方では、年の暮れのこの頃に、ユネスコ無形文化遺産にも指定された、田の神様へおもてなしを捧げる祭事「あえのこと」がおこなわれる。ナンテンはその年の収穫への感謝を象徴する植物の一つである。

<生活史> 関東地方の例(目安)



食堂の灯火に見立てられた密集する赤い果実

<類似種> ナンテンと同様に初冬に赤い実が成り、庭先によく見かける小低木にセンリョウ(千両)やマンリョウ(万両)があるが、センリョウもマンリョウも複葉とならず葉の縁は波打つか鋸歯がある。またトキワサンザシ(ピラカンサス)の枝には棘がある。

<一言うち>

ナンテンは「籬を転ずる」に通ずる縁起の良い樹木とされますが、御祝いの赤飯や魚料理にナンテンの小枝が添えられるのは、縁起を担ぐだけでなく、葉に含まれる「ナンジン」が熱や水分に触れることにより防腐作用がある「チアン水素」を発生させ腐りにくくする効果もあるのです。



小葉は革質でやや光沢がある

<人との関わり合い>

縁起木や厄災除けとして、玄関前や鬼門や裏鬼門に植えられてきた。また、さまざまな園芸品種も作り出され、白い実のシロナンテン、葉が黄色から赤に紅葉するオタフク南天、葉が糸状となる錦糸(キンシ)南天などがある。果実に含まれるドメスティンは運動神経の末梢に対しマヒ作用があり、ぜんそくなどの咳止めに効果がある。ハチ刺されには、よく揉んだ葉の汁をつけると痛み止めになる。ナンテンの葉や果実を刻みお茶にすると咳止めだけでなく、疲労回復や強壮などにも効果があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：冬(南天の実、実南天)、初夏(南天の花)】 日当りに南天の実の笑初 (高澤良一)

日当りや南天の実のかん袋 (小林一茶) 風なくば好き日和なり実南天 (小野房子)
とやかくの家相を払ふ実南天 (能村登四郎) しぐれたるあとの日が射し実南天 (鶯谷七菜子)
南天の花の白さのめでたけれ (高野素十) 麒麟の間南天の花を見て坐る (山口青柳)

分布：全国

ジャノヒゲ (キジカクシ科)

オフィオポゴン ヤポニクス
学名: *Ophiopogon japonicus*

蛇の髭 別名：リュウノヒゲ(竜の髭), ネコダマ(猫玉), 麦門冬(ばくもんとう), はずみ玉

主な生育場所

林床や林縁、樹木の根元、路傍、草地などに生育する。落葉樹林の落ち葉がよく積もる木陰などに多い。やや日陰を好むが、日当たりのよい場所でもみられる。公園や庭園に植えられることも多い。

特徴

短い走出枝を伸ばし群生して増える。10~15cmほどの多年生。幅2~3mm、長さ10~20cmほどの細長い葉を多数根生し株状となる。7~8月にかけて高さ7~18cmほどの花茎を出し、ややまばらな花序をつける。6花弁で径約7mmの花は白色あるいは淡紫色。花後にできる径7mmの球形の種子は冬期に瑠璃色に熟してよく目立つ。



名前の由来： 能面で老人を表す「尉(じょう)」のお面にはあごひげがあり、このあごひげに細い葉を見立てて「尉のひげ」(じょうのひげ)。これがジャノヒゲに転化した。

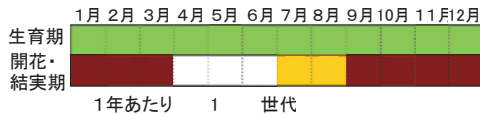
<農業との関係>

畑や水田内に生えることはなく、邪魔になることはない。一方、ジャノヒゲや園芸種で草丈が低い「タマリユウ」は、乾燥や冠水にも強く扱いやすいため、畦畔法面の管理を省力化するカバープランツとして利用される。例えば、タマリユウを10cm間隔で植え付けると約2年間で全面を被覆し雑草抑制に有効である (https://www.naro.affrc.go.jp/org/warc/research_results/h19/01_sakumotu/p21/index.html)。



樹木の根元に群生するジャノヒゲ

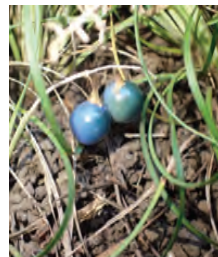
<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> ヤブランの草丈は20~40cmほどとなり、葉も広く、花穂が長区伸びる。また果実はジャノヒゲの鮮やかな瑠璃色に対し黒色。日当たりのよい場所にみられるツルボの花期はジャノヒゲよりもやや遅く、小さな花を穂状に密につける。

<一言うち>

これからの季節、ジャノヒゲの光沢のある瑠璃色の種子がよく目立つようになります。この種子、かなり弾力性に富み、アスファルトなどの地面に投げつけるとまるでスーパーボールのように強く弾みます。園芸種のタマリユウでも同じような実がなりますので、探して試してみてください。



熟すと鮮やかな瑠璃色となる種子

<人との関わり合い>

肥大した根を夏期に掘り上げて水洗い後、乾燥させたものは麦門冬(ばくもんとう)と呼ばれ、昔から滋養強壮、咳止め、去痰、利尿などに利用されてきた。また、四国などでは湯がいた茎は油揚げなどと一緒に煮こんで食べる。タマリユウも含め作庭やランドカバーにもよく利用され、植え込みの前景などに使われる。冠水にも強いので、最近では観賞用の水草と扱われることもある。熟すと光沢のある瑠璃色の種子は、冬枯れの野で良く目立つので、冬の季語として多くの俳句等にも詠われてきた。

<俳句や短歌への登場>

【季語：蛇の髭、麦門冬=夏、竜の玉=冬】

一日のほんの日当り竜の髭 (角 光雄) 行わたる掃除や藪に麦門冬(清民)

竜の玉深く蔵すといふことを (高浜虚子) 竜の玉などもあそぶ日もありぬ (山口青邨)

ひたぶるに念佛いたせ龍の玉 (辻桃子) 地球またかく青からむ龍の玉 (鷹羽狩行)

分布：北海道を除く全国

クログワイ (カヤツリグサ科)

エレオカリス クログワイ
学名: *Eleocharis kuroguwai*

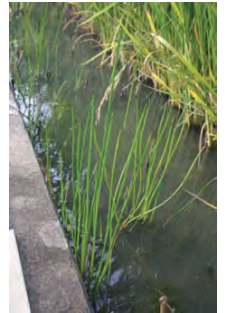
黒慈姑、烏芋 別名：エグ、タイモ、ピリピリグサ、クワイズル、イゴ、ゴヤ、ギワ、クワイ、クワエ

主な生育場所

水田や休耕田、水路、ため池、湿地、湖沼などで生育する。水田では冬期に乾きにくい湿田や半湿田で多く見られる。塊茎の寿命が長いので、転作後の畑にも見られることがある。

特徴

主に塊茎で繁殖する高さ30~90cmの多年生水草。最初、直立する細い針金状の茎が、径3~4mmとなり叢生し大株となる。葉のない茎は中空で多数の横隔膜で仕切られる。茎先に黄褐色で円柱形の花穂をつける。地下茎は地表下を水平に伸び、次々と子株を形成。秋に各株の基部から下方に地下茎を伸ばし先に塊茎をつくる。



畦際に生えるクログワイ

名前の由来：クワイ(慈姑)とは芋状の塊茎を食用とするオモダカ(栽培品種)のことで(2011年8月号で紹介)、クワイの塊茎によく似て色の黒い塊茎を形成することからクログワイ(黒慈姑)。

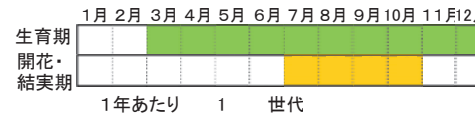
<農業との関係>

水田で多発生すると、イネの分けつを阻害し収量が半減することもある。またイネを倒伏させたり、絡まって収穫効率を低下させてしまう。除草剤も効きにくい。なかなか駆除しにくい難除雑草のひとつである。塊茎は冬期の乾燥に弱いため、多発生した場合、収穫後の秋耕や土壌深く形成された塊茎を表層に露出させる反転耕など、塊茎の密度を下げる努力を続けることが大切である。



伸ばした地下茎の先に塊茎(左上)をつける

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 同じような塊茎をつくるオモダカの葉はヤジリ型で塊茎も白っぽい。イヌホタルイやイグサなども葉のない茎が叢生するが、クログワイの茎内には所々にしきりの壁(横隔膜)があり、茎をつぶすとぶちぶちと音が出ることで見分けられる。

<一言うち>

もともと湿地や湖沼の植物だったクログワイが水田にも定着するようになると、イネ栽培に伴う耕うんや水管理のスケジュールに適応して、塊茎を形成する時期などが変化してきました。このように生育環境にあわせて生育パターンが変わっていくことを「生態型の今化」と呼んでいます。



花穂

<人との関わり合い>

古く万葉集の時代から塊茎を野菜として利用しており、江戸時代には荒蕪作物として水田の脇などに栽培されてきた地域もあった。また、近縁種で主に西日本で見られるイヌクログワイの栽培種(シナクログワイ)の塊茎は直径2~3.5cmと大きく、中華料理の食材として使われる。ただえぐみが強い(別名の由来)ため、下茹でしアクを除いてから油で炒めたり煮物にする。また、塊茎の皮にはフラボノイドが含まれ、塊茎を煎じたものは目の腫れや痛みなどに効用があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：初春】

君がため、山田の沢にえぐ採むと、雪消の水に、裳の握ぬれぬ (万葉集 詠み人知らず) ※えぐ=クログワイ

あしびきの、山沢えぐを採みに行かむ、日だにも逢はむ、母は責むとも (万葉集 詠み人知らず)

うは玉の烏芋のしめ花袖哉 (三浦 樽良) 時雨のや辛抱つよき烏芋掘 (鶴田 卓地)

分布: 全国

チカラシバ (イネ科)

カ芝 別名: プラシ草, ミチシバ, タヌキノシリオ, カグマ, コマツナギ, コツテイコカシ

学名: *Pennisetum alopecuroides*

主な生育場所

道ばた、野原、堤防や土手の法面、田畑の畦畔などに生える。日当たりのよい草地を好む。乾いた環境によく見られるが、いったん根を張ってしまうと多少の冠水を受けるような場所でも生育する。

特徴

高さ30~80cmとなる多年生。茎は直立し、叢生して大株となる。葉はほとんどが根生葉で暗緑色、長さ30~70cm、幅5~8mmと細長い。夏から秋にかけて花茎を直立し、先に黒紫色で長さ10~20cm、幅2cmほどの円柱形の花序をつける。果実の先端には2~3mmほどのノギがあり動物などにくっつきやすい。



名前の由来: 根がしっかりと土の中に張り、茎や葉も強く干切れにくいので、手で引っ張ってもなかなか引き抜けないことから、力強い「シバ」との意味でカ芝(ちからしば)。

<農業との関係>

頻繁に耕耘が繰り返されるような畑地や水田内には侵入しないが、果樹園や牧草地ではときに群落化する。放牧牛は出穂後のチカラシバを採食せず、また果実のノギが牛の眼や鼻を痛めてしまい問題となる。放牧地のチカラシバは放牧牛の密度を高め、春から秋まで連続放牧することで防除できる(<https://www.naro.affrc.go.jp/project/results/laboratory/nilgs/2001/nilgs01-27.html>)。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 秋の道ばたで円柱形の花序となるのは他にエノコログサの仲間があるが、エノコログサの仲間は叢生せず、また花序の幅は狭く、垂れ下がるものが多い。チカラシバの近縁の外來種ネピアグラスは大型で2mにも達し、穂は黄色い。

<一言うち>

チカラシバの近縁種には、主にアフリカや東アジアの乾燥地帯で栽培されるトウジンビエがあります。チカラシバよりも密に果実をつけたガマの穂に似た穂をつけ、実は粉にされ、北アフリカ料理のクスクスの材料にも利用されています。ただ、高温多湿の日本では栽培は難しいようです。

<人との関わり合い>

食用や薬草として利用された記録はないが、まるで試験管プラシのような穂はよく目立ち、子どもたちの野辺の遊び道具として使われてきた。例えば、簡単には引きちぎりにくいことから、あぜ道の両側に生えるチカラシバの葉を結んで、足をひっかけさせる罫としてしたり、エノコログサの穂のように穂を握りながら斜上するノギを利用して毛虫のように動かしたりして遊ぶ。また、いわゆる「ひっつきむし」のひとつで、セーターによくノギが絡まりなかなか取れなかった記憶のある方も多いのではないだろうか。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 秋?】 立ちかわり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり (万葉集 田邊福麿)
花ぞ見る道の芝草ふみわけて好野の宮の春のあけぼの (藤原 季能)
ふるさとを恋ふる涙やひとりゆくともなき山の道芝の梅雨 (慈円)
道芝や露ふみわけて見しほどに逢ふ夜の袖もぬれにけるかな (大江 匡房)



道ばたによく見られる



ブラシのような穂

分布: 本州, 四国, 九州

チャノキ (ツバキ科)

茶の木 別名: チャ, 茶樹

学名: *Camellia sinensis*

主な生育場所

茶畑での栽培のほか、庭木や生垣などとして植栽される。また、畑と畑の境界を示す畦畔木として植えられることもある。野生では、伊豆半島や九州地方の照葉樹林帯の低木~中層木として育つ。

特徴

野生では10m程度の高さにも成長するが、栽培下では刈り込まれるためよく分枝し高さ2mほどに株立ちする。樹皮は灰白色。葉は表面に光沢があり、縁が波状の細かい鋸歯となり互生する。晩秋に枝先の葉腋に直径2~3cmで花弁が5~7枚の白い花を下向きにつける。果実は直径1.5~2cmのほぼ球形で翌年9月ごろに成熟する。

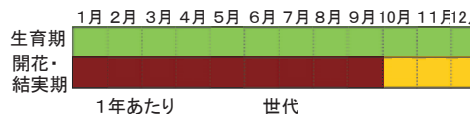


名前の由来: 中国大陸から茶の木がもたらされたときに、漢名の「茶」を音読みし、「チャ」とした。

<農業との関係>

現在、栽培されるチャノキは、1191年に禅僧の栄西が中国から持ち帰った種子の子孫とされる。最も栽培面積が広いのは静岡県で、次いで鹿児島県、三重県と続く。静岡県牧之原台地などでは、茶園周辺に採草地を設け、刈り取った草を茶樹の株元や畝間に敷いて良質茶を生産する伝統的農法が行われており、2013年にFAO(世界食糧農業機関)から世界農業遺産として認定された。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 同じツバキ科のヤブツバキの葉には鋸歯がないかまたは目立たない。サザンカの花はツバキやチャノキと異なり、花ごと落ちずに花弁がバラバラに散る。低木で葉の形や大きさがよく似るヒサカキの花は直径5mmほどと小さく春に咲く。

<一言うち>

中国の古書「神農本草」には、古代中国で医療と農業を広めたとされる伝説的な大帝神農が、様々な草木を自ら食しその薬効を調べた際に何度も毒にあたり、茶の木の若葉で解毒したと紹介されるほど、古くから薬効あつたか薬草として知られていたようです。

<人との関わり合い>

飲用の茶葉は新葉を摘み取ったもので、乾燥させ緑茶や抹茶とする。茶葉を発酵させるとウーロン茶や紅茶となる。緑茶などの茶葉は、飲用後の茶殻も含め食べることもできる。主な薬効成分はアルカロイド、フラボノイド、タンニンなどで、茶葉には利尿、発汗、下痢止めなどの作用があるとされる。民間療法では、口内炎、咽喉炎、風邪予防のうがい薬として利用されたり、細菌性の下痢に濃く煎じた茶湯が効くとされる。また種子は去痰や咳止めに効果があるといわれている。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 初冬(茶の花)】
日にようて茶の花をかぐ命かな (飯田蛇笏) 茶の花の映りて水の澄む日かな (飯田龍太)
いつしか明けてみる茶の花 (種田山頭火) 茶の花に今夕空の青さかな (久保田万太郎)
茶が咲いていちばん遠い山が見え (大峯あきら) けふあす何事もないうら白く咲いた茶の花 (中川一碧樓)



多数の長い雄しべが目立つ白い花が下向きに咲く



果実は熟すと3裂、各室に1~2個の種子が入る。

分布：全国

クコ (ナス科)

リキウム シネンセ
学名: *Lycium chinense*

枸杞 別名：ゴジベリー、ウルフベリー、カラスナンバン、カワラホオズギ、しこ

主な生育場所

日当たりの良い人里近くの堤防や荒地、路傍、藪などに見られ、山地ではみかけない。市街地や庭先などに植栽されることも多い。やや湿った水辺を好み、海岸沿いの砂地や溝の中にも生える。

特徴

1~2mほどの落葉低木。細長い枝を株元からよく分枝し斜上して叢状となる。楕円形の葉は互生し、長さ1.5~6cm、幅0.5~2.5cmほど。葉の付け根に小枝状の棘が付きやすい。夏から秋にかけて葉腋から細い花柄を伸ばし直径1cmほどで長い雄しべが目立つ薄紫色の花を1~3個つける。果実は赤く熟し、楕円形で長さ1.5cmほど。



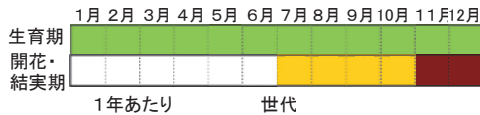
ヤナギのような枝葉で葉の基部に棘がある

名前の由来：中国名の「枸杞」を音読みし、クコ。「枸」とはカラタチ(枸橘)を指し、「杞」はコリヤナギ(杞柳)のこと。カラタチのようにトゲがあり、コリヤナギのような葉や枝を持つことから。

<農業との関係>

河川敷などでは藪となり雑草化することも多いが、耕起には弱いので耕地内で見ることはない。粗放的な管理の果樹園や休耕地、耕作放棄地ではときに繁茂がみられる。また、畦畔や農地わきに植栽されると、ほふく茎によって株を増殖し農地に侵入しやすくなるので注意が必要である。また叢状になると、棘によって刈り払いなどの管理がしづらくなる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種>

クコと同様に路傍や原野などに生え、よく似た赤い実を付けるに樹種にグミ(グミ科)の仲間があるが、グミの葉の裏は銀色の鱗状毛を密生し、ナツグミの果実は5~7月に熟す。またアキグミの果実は直径1cmほどの球形で表面に毛がある。

<一言うち>

クコは日本でも古くから健康長寿の食材と知られ、「後然草」にも登場する久米仙人も愛用し186歳まで長生きしたとされます。また、文豪夏目漱石の名著「草枕」にも「家の南面に枸杞の生け垣を植えると、病人が出ない」の一節があるほど、長寿・厄除けとして身近な植物だったのです。

<人との関わり合い>

低木でトゲがあり萌芽力も強いので、厄除け・魔除けも兼ねて、生け垣に利用されることも多い。また、果実が「枸杞子(こし)」、根皮が地骨皮(じこっぴ)、葉は枸杞葉(くこよう)と、全草が生薬に使われるなど、古来から有用な植物として利用されてきた。枸杞子には強壮、疲労回復、頭痛、かすみ目などに、地骨皮には解熱、鎮咳、去痰作用、枸杞葉は動脈硬化や高血圧症に良いとされる。また、果実は杏仁豆腐の添え物などデザートや菓子に、若葉は天ぷらや炊き込みご飯にして食べられる。

<俳句や短歌への登場>

『季語：晩秋(枸杞の実)』

枸杞垣の似たるに迷ふ都人(与謝蕪村) 草枯るゝ賤の垣根や枸杞赤し(正岡子規)
枸杞の実を噛み東京を憎みをり(原田 喬) 枸杞の実のさびしさも夜を越えざりき(加藤秋郎)
枸杞にかも雨降る験覚めざるは(千代田葛彦) 枸杞の実の人知れずこそ灯しをり(富安風生)

分布：本州・四国・九州

ウラジロチチコグサ (キク科)

グナファリウム コアルクタータ
学名: *Gnaphalium coarctata*

裏白父子草 別名：アメリカチチコグサ

主な生育場所

田畑の畦、道ばた、堤防、芝地、公園、庭先、果樹園、荒地、植え込みの下、コンクリの隙間など。種子が風散布されるので、乾いていて日が少しでもあたる土地ならどこでも侵入・生育する。

特徴

南アメリカ原産の多年生。高さ30~80cmほど。茎は基部から短く横に這って分株をつくる。葉はへら状で表面は光沢のあるやや明るい緑色、裏面には密着した白毛が密生し、白く見える。ロゼット葉で越冬。茎につく葉の縁は波打つ。茎の上部に多数の花を集めた頭状花をつけ、総苞片は光沢のある緑色。種子には冠毛がある。



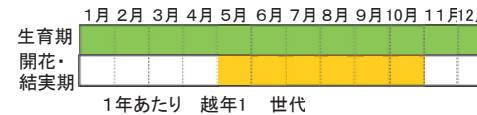
初夏から秋にかけて長期間開花がみられる

名前の由来：チチコグサ(右下写真)に似て、葉の裏面がチチコグサよりも白く見えることから裏白チチコグサ。また別名は、南アメリカ原産から。

<農業との関係>

基部から枝分かかれ、地面に張り付くように密に分株を形成しながら広がり、踏みつけや刈り込みに対しても強く、果樹園や畑地、芝地で害草となることがある。また除草剤に対しても枯れにくいことから、ゴルフ場などでは近年増加しているようだ。ただし、耕起には弱く頻りに作付けするような畑には見られない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種>

チチコグサの葉は線形でウラジロチチコグサよりも細い。また葉の裏面はウラジロチチコグサ同様白っぽくなるが、葉の表の色は濃緑色。チチコグサモドキの葉は幅広いが葉の裏面はあまり白くならず、葉の表面にふんわりした毛が多い。

<一言うち>

チチコグサの仲間には外来種が多いのですが、最近(昭和40年代後半ごろ)定着するようになった新参者です。急速に分布を拡げており、他のチチコグサの仲間よりも花期が長く遅くまで花をつけていることから、各地の庭先などにも葉の裏が白いロゼットが目立つようになってきました。



ロゼット葉の裏面には密な白毛があり白い



チチコグサとチチコグサのロゼット(左下)

<人との関わり合い>

同属のハハコグサは春の七草のひとつとなっていますが、同じように在来種であるチチコグサや外来種のウラジロチチコグサなどを食べたり薬用に利用した記録はない。ただ、庭先などで冬期に光沢のある明るい緑色の葉を広げているロゼットの姿がよく目立ち、名前は知らずとも憶えのある方も増えてきているのではないだろうか。お正月飾りに使われるウラジロなどに通じ、どこかすがすがしさと縁起物を感じさせてくれる草花である。

<俳句や短歌への登場>

【季語：春 ※チチコグサ】 ウラジロチチコグサの季語は不明。

父子草父の寡黙をわれも享く(椎木万紀子) たまさかに子と野に出れば父子草(豊田 進)
けぶれるは羅漢の山の父子草(原田 喬) 父子草母子草その話せん(高野素十)
父子草もどきが飛ばす梅雨の絮(青木重行)

分布: 全国

コナギ

(ミズアオイ科)

モノコリア ヴァージナリス プランタギニア
学名: *Monochoria vaginalis* ver. *plantaginea*

小漣 別名: ナギ, ミズナギ, イモグサ, ツバキグサ, ハート草

主な生育場所

かつて原産地の東南アジアから稲作とともに伝わってきたイネの随伴植物とされ、日本では水田や休耕田など、水田周辺にしか生育しない。種子寿命は長く、耕作放棄田でも復田すると発生してくる。

特徴

嫌気的条件下で発芽する一年生の単子葉植物。線形の子葉に続き、やや広い線形葉が数枚展開し、光沢のある卵形あるいは心臓形の葉をつける。大株はやや横に這う。夏～秋に葉腋に短い花茎を伸ばし青紫色の6弁花を房状に2～8個ほどつける。開花後花茎は垂れ、多数の種子を含む長さ1cmほどの楕円形の果実をつける。



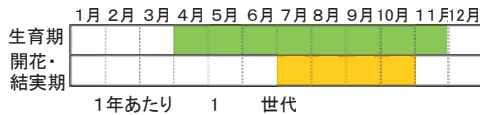
水田のコナギ(右下: マキ科の樹木ナギの葉)

名前の由来: 同属のミズアオイとともに、マキ科の樹木である漣(なぎ)の葉に似ていることからナギ。ミズアオイよりも小型のため、コナギ(小漣)。またサツマイモの葉にも似ているためイモグサ。

<農業との関係>

ノビエと並び、稲作で見られる代表的な雑草。草高は低く、10～30cmほどだが、窒素等の吸肥力が高く、密生するとイネの生育が抑制されるため、古来から強害雑草として除草の対象となってきた。大株になると根が強く張り、除草に苦労するため、芽生えたばかりのコナギを這いつくばり取っていた。しかし、戦後の除草剤の普及により、今では有機農業などの水田以外はあまり見かけない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



幼植物(やや幅の広い線形葉)

<類似種> 北日本に多いミズアオイは、湖沼や河川にも見られ、コナギより大形で葉の上まで花茎が伸び、総状に径2.5～3cmの花(コナギの花は径1.5～2cm)をつける。外来種のアメリカコナギは西日本に多く、葉は細長く基部は心形にならない。

<一言うち>

語源となった漣(ナギ)は熊野神社の神木とされ、風ぐや籬ぐと通ずることから、船乗りを中心にその葉を身につけ災難除けや厄除けとしていました。またコナギの葉と同様に平行脈で縦方向には裂けにくいことから、夫婦円満の象徴とされます。コナギも同じ効能があるかも知れません。



コナギの花

<人との関わり合い>

コナギは、イネの栽培に伴って大陸から渡ってきた水田雑草で、万葉集などにも登場するなど、古くから馴染みの植物である。ミズアオイも含む「ナギ」は、平安時代ごろまでは食用として栽培され、今でも東南アジアでは食することがある。最近、コナギを栄養分析した結果、ビタミンやミネラルが多く含まれ、野菜として栄養価が高いことが報告された。そのため、改めて食材としての価値が目立っている。また、中国では民間薬にも利用され、解毒、鎮咳作用から、高熱、喘息などに用いられる。

<俳句や短歌への登場>

【小水葱(こなぎ)の花: 秋】 母の里へ辿る稲田のこなぎかな (松瀬青々)
苗代の子水葱が花を衣に摺り 馴るまにまに何か愛しき (詠み人知らず)『万葉集』
春霞 春日の里の 種子水葱(うゑこなぎ)苗なりといひし 枝はさしにけむ (大伴駿河麻呂)『万葉集』
おのれまで恋路にぬれて 苗代の子なごがもとに鳴くかはづかな (藤原知家)

分布: 全国

キキョウ

(キキョウ科)

ブラティコドン グランディフロルス
学名: *Platycodon grandiflorus*

桔梗 別名: キチコウ, おかとき, アリの火吹き, 桔草(コウソウ)

主な生育場所

草原や、山間部の水田などに隣接する斜面林の裾刈り草地、ため池の堤体法面など、定期的に草刈りされるような日当たりの良い草地にみられる。觀賞用に庭や公園などに植栽されることも多い。

特徴

太い根茎を持つ多年生。茎は直立し高さ0.5～1mほど。卵形～狭卵形の葉には鋭い鋸歯があり互生、ときに輪生状。葉裏は粉白色を帯びる。夏から秋にかけ茎先に青紫色の径3～5cmほどの広鐘形で5裂する花を数個つける。園芸種には白花や八重咲などがある。花後、果実が熟すと上部が5裂し、翼のある多数の種子を吐き出す。

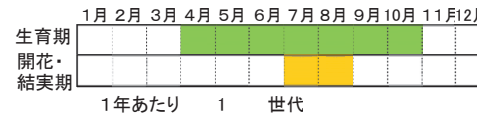


名前の由来: 漢名の桔梗をキチコウと呼んでいたものが、キキョウに転訛した。トキとは同科のツリガネニンジンの異名。また蟻のギ酸に触れると花弁が赤く染まることからアリの火吹き。

<農業との関係>

畑地などで雑草となることはない。しかし、日照を確保するための水田わきの裾刈り草地やため池堰堤、世界農業遺産に認定された静岡県の茶園周辺にみられる良質茶生産のためのススキ敷草を確保する「茶草場(ちゃくさば)」など、農地周辺の程よく草刈りされている草地でよく見られ、里山ではワレモコウなどと同様に農業に伴う草刈りに依存している草原性の植物の一種といえる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



ため池の堤体法面にワレモコウなどと咲くキキョウ

<類似種> 同じような草地に生えるツリガネニンジンは3～5枚の葉を輪生し、円錐形の花序で狭鐘形の花を輪生。リンドウの花期は晩秋で、葉は3脈が目立ち対生で先がとがる。また花色は紫色で先が浅く5裂するが筒状、葉脇にかたまつてつく。

<一言うち>

古くから親しまれるキキョウの花は家紋の意匠としてもよく用いられます。明智光秀をはじめ、美濃の土岐一族の桔梗紋は有名ですが、平安時代の陰陽師、安倍晴明が用いた魔除けの呪符である五芒星は、五裂するキキョウの花に見立てられ、「晴明桔梗」として神紋にも使われています。



さまざまな意匠の桔梗紋 | 中右: 土岐桔梗, 右下: 晴明桔梗

<人との関わり合い>

秋の七草で朝顔とあるのはキキョウとされ、身近にみられる青紫の大きな花は昔から觀賞用として愛でられ、江戸時代以降、多くの園芸種も生まれた。またキキョウの花のような青みを帯びた紫色は伝統色「桔梗色」にもなっている。しかし、里山の荒廃に伴い、適度に管理される草地が減少したことから、現在では野生のキキョウは、絶滅危惧種に指定されるほど少なくなりました。また、根に多くサポニンを含み、生薬にも利用され、鎮咳、去痰、排膿作用がある。若芽や根は水に晒し食用にもなる。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】 こいまろび恋は死ぬともいしろく色には出でじ朝顔の花 (詠み人知らず)『万葉集』 ※朝顔=キキョウ
きりぎりしやんとて咲く桔梗かな(小林 一茶) 白桔梗君とあゆみし初秋の林の雲の静けきに似て (若山 牧水)
椎の樹に蜩鳴きて夕日影なめに照すきちかうの花 (正岡 子規) 草刈の籠の目を洩る桔梗かな (夏目 漱石)
きちかうのむらさきの花委むわが身は愛しとおもふかなしみ (斎藤 茂吉)